



Title	<書評> 葛西賢太/板井正齊編著 『叢書・宗教とソーシャル・キャピタル3 ケアとしての宗教』
Author(s)	小池, 靖
Citation	宗教と社会貢献. 2013, 3(2), p. 73-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

葛西賢太／板井正斉編著

『叢書・宗教とソーシャル・キャピタル3 ケアとしての宗教』
明石書店、2013年4月、A5判、300頁、2500円＋税

小池 靖*

1. はじめに

本書は、シリーズ「叢書 宗教とソーシャル・キャピタル」の第3巻として編まれたものである。地域社会を扱った2巻は本誌3巻1号でもレビューしたが、この巻では、広い意味で弱い立場にいる人々に対する「ケア」の現場で、宗教がいかに社会貢献できるのかが論じられている。

2. 本書の内容と構成

本書は、3部構成となっており、Iでは「宗教のケアが橋を架ける」と題して、主に宗教の側が、教団の枠組みを越えて弱者に接近し、ケアを施す諸相が論じられ、IIでは「宗教のケアが絆を強める」と題して、主に共同体の内側で宗教的ケアがその集団の紐帯として機能している様子が描かれている。当然「I」では「橋渡し型ソーシャル・キャピタル」が、「II」では「結合型ソーシャル・キャピタル」がイメージされている (p. 298)。III部では、鼎談のかたちで、主に医療現場での宗教的ケアの諸相が専門家によって縦横に語られている。以下が目次構成である。

まえがき 葛西賢太

総説 橋を架け絆を強めるケア 板井正斉・葛西賢太

I 宗教のケアが橋を架ける

第1章 教誨師と更生活動 金澤 豊・真名子晃征

第2章 スピリチュアルケアのプラクシスとその宗教的基礎：病院チャプレンの語りと聖書思想から 柴田 実

*立教大学社会学部准教授・koike-toiawase@rikkyo.ac.jp

第3章 自死対策における宗教者の役割 宇野全智・野呂 靖
インタビュー「暗闇に下りていく道しるべ」がケアには必要だ 岡部 健

II 宗教のケアが絆を強める

第4章 ソーシャル・キャピタルとしての天理教里親活動の可能性 金子珠理

第5章 鎮守の森に保育園があることの可能性 室田一樹
インタビュー「生命をことはぐ」ことは、医療にも神道にも通じる 足立正之

インタビュー「ものくさ」を養う、ゆとりをつちかう 櫻井治男

III 鼎談 心のケアと魂のケア 安藤泰至×窪寺俊之×深谷美枝

あとがき 板井正斉

まえがき～総説にかけては、本書の問題意識が示されているが、それは野心的であるのと同時に、やや遠慮がちな語り口でもある。「宗教者がケアの場にいる場合の難しさも指摘しておかねばならない……絆を強める機能は、結束にも束縛にも矯正にも展開しうる」(p. 32)。宗教者によるケア活動に対して、市民のあいだには警戒心も予想されうるのかもしれない。そのような事態を前提としているということなのだろうか、「以下の章で、具体例を通して、当事者の体験理解に努力を払いながら、社会と宗教の互惠性の(ケアにおける)〈適切さ〉を探求していこう」と総説は締めくくられている(p. 36)。

【I 宗教のケアが橋を架ける】

教誨師(きょうかいし)とはいわゆるチャプレンのことであり、1章「教誨師と更生活動」(金澤 豊・真名子晃征)は、主に刑務所づきチャプレンの日本での活動を論じた貴重な論考である。日本の教誨師の3分の2は仏教系であることや、その仕事が完全なボランティアであるということなども紹介されている。そして教誨師は、特定の信仰を押し付けてはならない

ものの、受刑者の宗教的ニーズを満たすための儀礼などを執り行うこともあると書かれている。

2章「スピリチュアルケアのプラクシスとその宗教的基礎：病院チャプレンの語りと聖書思想から」（柴田 実）では、病院チャプレンA氏のインタビューから、A氏のケアへの関わり方が、聖書のいかなる精神に基づくものなのかを、聖句を引用して推察・解説するものとなっている。

3章「自死対策における宗教者の役割」（宇野全智・野呂 靖）は、自殺防止活動における仏教教団による取り組みを紹介したものである。「安心して関われる社会との窓口」としての「かかりつけ寺院」といった発想など、仏教による社会貢献の最前線を示す論考となっている。

第I部末尾のインタビュー（『暗闇に下りていく道しるべ』がケアには必要だ）では、在宅緩和ケアの権威・岡部 健によって、医療の現場が「合理主義の盲信」に陥ることなく、死期が近い患者たちが語る「お迎えが来た」といった感覚のリアリティにケア提供者が寄り添うことで、市民の持つ死生観を大切にすることが説かれている。

【II 宗教のケアが絆を強める】

4章「ソーシャル・キャピタルとしての天理教里親活動の可能性」（金子珠理）によれば、天理教は、戦後の混乱期から孤児を引き取ることを「おたすけ」として奨励してきたという。そうした天理教の里親活動が「教会長の夫人」に対して負担が大きくなりがちであるということにも少し触れているが、全体としてこの章は、新宗教のもつソーシャル・キャピタルが、ケア実践として確固たる規模で機能してきたことを示してもいるだろう。

5章「鎮守の森に保育園があることの可能性」では、宮司であり保育園園長でもある室田一樹が、保育士や母親の体験も紹介しながら、保育園体験を、保育士と園児が互いにケアされている関係性としてとらえている。結論としては、生活文化の中の宗教性を、神社という環境の中で自然に継承してゆくことの大切さをうたっている。

II部末尾の、足立正之、櫻井治男それぞれのインタビューにおいても、神学・教学・布教といった特別なことを持ち出すのではなく、日本人が長く継承してきた土地のカミへの思いや、家族間の支え合いをむしろ大事にすべきだという姿勢が顕著だ。

I 部がキリスト教と仏教の話題であり、II 部が主に神道的宗教観の話となっているのは、前者が日本において宗教から世俗への橋渡しをしてきた存在であり、後者が日本人の共同体的紐帯を担ってきた存在であるということを図らずも示しているのかもしれない (p. 298)。

【III 鼎談 心のケアと魂のケア】

最後の第 III 部では、安藤泰至 (死生学)、窪寺俊之 (病院チャプレン)、深谷美枝 (牧師) の三者が鼎談をおこなっている。話は多岐にわたり、日本でチャプレンの数が少ないこと、日本ではスピリチュアルケアが「宗教的ケアではない」と、ことさらに強調される傾向があることなども論じられている。全体に、スピリチュアルケアの場で、宗教でないといけないことがあるいっぽうで、宗教性を強調してしまうと社会から拒否されかねないという微妙なバランスが存在しているということが浮かび上がってくる。「宗教者が様々な社会活動をするときに、世間様にぶちあたって、しばしば自粛してしまうことが、日本の宗教者にとって、大きな課題」という深谷の発言にそれが集約されていると言えよう (p. 292)。

3. 評価

全体としてこの書は、宗教による、あるべきケアのあり方を論じたものになっているようだ。ソーシャル・キャピタル概念についての精緻化を目指した研究ではないのかもしれないが、橋渡し型／結束型ソーシャル・キャピタルの両側面が、各セクションによってバランス良く示されている点は評価できる。

「叢書の中では他の三部と異なり、研究者だけではなく宗教者にも、当事者の感覚を語ってもらった」(p. 7) とあるように、同シリーズの他の巻以上に、当事者の声をそのまま論文のかたちで収録している。中には2章、5章のように、数名のインタビュー記録がそのままかなりの尺で使われていたり、鼎談もあつたりと、全体として雑誌的な作りの一冊になったとも言えるだろう。ケアとしての宗教の諸相を、2010年代流に見つめなおすには好著となっている。

しかし、そのような作りであるがゆえに、やや不十分かもしれないのは、

本書全体を貫く問題意識、枠組みが見えにくくなっていることだ。たとえば、この書の想定読者層が一体どんな人々なのか、最後までよくわからなかった。想定読者は、ケアを請け負う当事者なのか、ケアされる当事者なのか、あるいは現代宗教研究者だけなのか。

また、細かいようだが、241ページの表に『臨床宗教師』に類する資格」といった題名がつけられているが、編著者らの考えでは、臨床宗教師がこの分野の最も標準的な資格ということなのだろうか。「スピリチュアルケアに関わる資格」などのほうが、より広い読者層にとってはわかりやすいものとなっただろう。そしていずれの文言を使うにせよ、臨床宗教師がいかなる資格なのかについて、本文中にほとんど説明がないのもやや不思議に思われた。

また、宗教的ケアの適切さをさぐるという、やや遠慮がちな姿勢から考えると、宗教的ケアにしかなしえない事柄について、もう少し自信を持った提言があっても良かったのではないか。

その意味でさらに言えば、宗教の強みについての自覚的な記述も、もう少し望まれるところである。福祉や社会的再分配についての宗教的起源などは、福祉の入門書にも書いてあることだが、この書のどこかでいま一度強調しても良かっただろう。病院チャプレンやターミナルケアといったトピックが多いのは、宗教というものが、死後の世界の問題を扱える唯一の社会制度であるからに他ならない。「死後の世界について語ってはいけない」「宗教観を押し付けてはいけない」というのは、一見ケアへのアクセシビリティを高めるのかもしれないが、宗教者の活動の単なるセラピー化は、宗教の強みを失ってしまうことにもつながりかねないだろう。

宗教がソーシャル・キャピタルとして機能する文脈で、ケアとしての宗教への期待や注目は予想以上に大きいようだ。今後、宗教とケアをめぐるこうした研究が、当事者の立場論のみに偏りすぎることなく、宗教独自の強みにも注目しながら、より広い読者層に「橋を架ける」ものとなることを期待したい。